

コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo. 143

2016年12月



2016 軍人キリスト者東アジア大会に参加して

コルネリオ会 会長 石川信隆

この度、台北で行われた軍人キリスト者東アジア大会に10月17日-18日の間、参加してまいりました。

大会の場所は、台湾チェンタン海外青年活動センターと言って、青少年を訓練する立派な施設でした。大会のモットーは、「キリスト・イエスにあってみな一つ」(ガラテヤ 3:28)で、大会の目的は、「キリスト・イエスにあってみな一つ」という喜びを以て、お互いに主を崇め、お互いに励まし合い、軍隊の中に福音を広めていくことでした。

1日目の歓迎夕食会では、挨拶に始まって、台湾固有の踊りや演奏、また韓国代表団の賛美もあり、カザフスタンのビクトル兄が即興でピアノ演奏と歌を披露しました。外国に行くと何か一つ芸(歌か踊り、楽器など)ができることが必要と感じました。

2日目の午前の基調講演メッセージの前に、日本がお祈りをするように言われましたので、ラッセルさんにご指導いただき英語でお祈りをさせていただきました。

基調講演のメッセージは、詩編 33:12「幸いなことよ。主をおのれの神とする、その国は。神が、ご自身のものとしてお選びになった、その民は。」から、台湾(中華民国)と中国(中華人民共和国)がイエスキリストにあって一つになれるように祈ってください、といった内容でした。

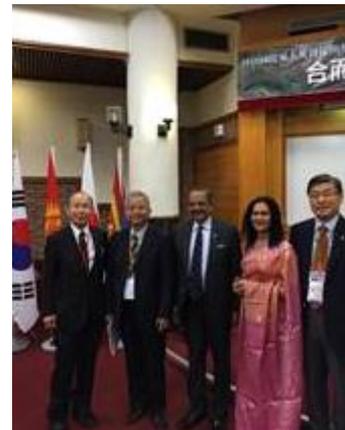
2日目の午後、私は、日本のコルネリオ会の報告をいたしました。

まず、コルネリオ会の簡単な歴史、

1989年にエステラフィンチ宣教師によって、横須賀を拠点として日本の軍人たちにキリスト教が宣教されたこと。1959年に戦後のコルネリオ会が発足したこと。1986年に日本で初めてアジア大会が開催されたこと。その時、私は未信者でしたが、その大会期間中にイエス様が私の心に入って下さり、悔い改めの祈りを韓国の若いチャプレンの前でしたこと。



東アジア大会集合写真



左から 著者、新東アジア会長、世界会長夫妻
前東アジア会長

祈りの課題として、若い新入会員が引き続き例会に参加できるように、また英語聖書研究会が引き続き行えるように、さらに防大聖研が再開できるようにお願いしました。そうしたら、終了後、東アジア会長と理事会のメンバー全員が、私の頭へ手を置いて日本人の救いのため、コルネリオ会のために祈ってくれました。感激のあまり私は涙が溢れ出て止まりませんでした。帰国後、リック大佐の奥さんからメールが来て、「台北で会って嬉しかった。あなたのために祈ったので聖霊の大きな働きが下ったと思う。主の喜びの涙を流すあなたを初めて見た。

主を賛美します。」そして、

「あなたの始めは小さくても、その終わりは、はなはだ大きくなる」(ヨブ 記 8:7)のみことばが書き添えてありました。

私は2日目の夕方に北京へ衝撃国際会議のため出発しましたが、貴重な経験と主からの励ましを受けることができました。

今回の台北・北京の旅が主によって守られたこと、皆様のお祈りのお蔭であったことを覚え、心から感謝する次第です。

ピューリタンについて (その1) 運動の概要

コルネリオ会会員 長濱 貴志

米国クリスチャンの友人に質問をしたことがある。「清教徒、特に1620年、英国からピルグリムファーザーズとして米国に渡った初期の方の歴史に興味があり、どのような人々だったのか。」と。

彼の答えは、「私の先祖がそうです。英国にはそれを証明する墓石がありました。」というものであった。私が求めていた答えとはかなり外れているが、かなり「ピューリタン」というものが身近になった気がした。

私が求めていたのは、何故ピルグリムファーザーズと言われるピューリタンの一行は、母国英国を離れ、新しい地に向かうことになったのか。その背景である。英国ではどのような状況になっていたのか。英国を出て行かざるをえなかった理由は何か。新しい地でピューリタン一行は、何を求めていたのか。その原動力となったものは何であったのかというものである。

「ピューリタンとはそもそも何か」から理解できていなかったのである。

まず、ピューリタン運動がどのようなものかその概要を見てみたい。いくつか掻い摘んだ説明を試みる。

ルターに始まる宗教改革の動きは、ヨーロッパのカトリック教国の中に次のような影響を及ぼした。ルターは、免罪符等で罪の軽減及び免罪を図ろうと

する聖書の主旨と異なる働きに反対する。形式主義、権威主義的なカトリックの礼拝様式、組織運営に異を唱える。聖書の教えに立ち返ろうとする働きである。

この影響は、英国にも及んだ。英国ではその宗教改革の流れを受け、英国国教会をカトリックの流れから改革した教会にしようとエリザベスI世による大改革が行われた。しかし、教会組織は国王(神からの権威を受け継いだものとして)を頂点とするカトリック同様の宗教組織、ヒエラルキーを保持した改革であった。そこには、国家プロテスタントにおける宗教的関心と国家的関心との結合が見られた。

ここに反対する人たちが出てくる。英国国教会は、宗教改革の主旨である聖書の教えに立ち戻ろうとする働きとは異なる。改革したとはいえ不十分だった。そこで英国国教会支持者(アングリカン)に対抗する運動が起きる。これがピューリタン運動の始まりである。

では、どのような出来事があったのか紹介する。1554年春頃から、宗教改革を徹底し、純粋化(ピューリファイン)を図る者は、メアリー女王の処罰に遭うか、難を逃れ英国を脱出、ルター派の教徒が占め始めた大陸のウェーゼル、フランクフルト、バーゼル、ジュネーブ、エムデン、ストラスブール、マールブルクに渡り始める。これはメアリーエグザイル(Marian Exiles)とも言われ多い時には一度に8

00人もの反対者が大陸に渡った。

カルバンの働きが見事な改革を成したことに感銘を受け、共感する信者も多く、カルバン主義の強かったジュネーブにも向かった。

1555年には、「祈祷書」をめぐる英国国教会派の有力者コックスと改革を推進しようとする（フランクフルトでの抗争の主演となる）ノックスを中心に逃避地フランクフルトで対立が起きる。これは、同運動の源流とも言われ、聖書に基づく礼拝様式を生み出す始まりとなる。

1620年には、ピルグリムファーザーズと言われる信徒の群れが新転地での信仰共同体、社会を求めて出航する。新天地では、メイフラワー号でプリマスという地に到着する。彼らは、ウィリアム・ブラドフォードなどに導かれたスクルービという村出身の群であった。

英国内では、アングリカンに対抗し、聖書の信仰、礼拝様式への改革がより先鋭化してくる。例えば、ケンブリッジ大学のレディー・マーガレット神学教授カートライトなどは、アングリカンを問題視する教えを説き、先の教授職から追放された。彼らは、国教会に関係する要職等を解任されて行く。

1642年には、英国国内で、王党派とピューリタンを中心とする議会派の間に内乱が始まる。改革を推進し続ける働きは、ついに1649年、国王チ

ャールズ1世を裁判に掛け、処刑するに至った。王政廃止。その後、クロムウェルを中心に共和制がとられるが短命に終わり、1660年、王政に振り戻されることになる。（王政復古）

出来事を見れば、歴史の教科書通りで「何だ体制に反対して、結局失敗か」と理解してしまうかもしれない。

しかし、このピューリタン運動の中から聖書の信仰、聖書の礼拝様式、移動（エミグレ）、終末的信仰、契約、民主主義といった現代の私たちが礼拝を守っている様式と原則、私たちが社会で働く上で各組織に見られる機能別の組織、人材の採用方法、国家の働きと教会の宗教的関係を切り離そうとする宗教分離等の原則のきっかけが生み出されていった。

次に、信仰に関わる側面として聖書に基づく信仰である聖書の信仰、現世よりも約束された御国での喜びを求める終末的信仰、地区教会（パリシュ）での働きを離れ外に出て行く、土着ではない信仰（エミグレ）等の特色を見ていきたい。

参考図書

- 『ピューリタン—近代化の精神構造』 大木英夫著、中央公論から出版
- 『偶然性と宗教』 大木英夫著、ヨルダン社

神は小さな願いをも

コルネリオ会会員 加瀬 典文

ものだと思っていました。

しかしながら、相手は陸自の指揮官、私は空自の一幕僚。多分会うことはないのだろうと考えていました。でも、その人は私の心の奥底に忘れることはない存在でした。

月日は流れ、私は地方協力本部の募集課長に任じられました。地方協力本部は陸自を主体とした組織ですが、募集は陸海空共通の仕事なので、私のような空自の募集課長も若干名います。そして、上司の地方協力本部長は陸自でした。着任して間もなく私はあることに気づきました。本部長のプロフィール

以前、ニュースレター（127号 2011.10）に、東日本大震災の災害派遣時のあかしを掲載させていただきました。その中で、かつて同じ部隊にいた後輩から聞いた話として、東日本大震災の本震以後の最大余震である4月7日の地震を、前もって言い当てた災害派遣指揮官がいたということを書きました。その人は災害現場で、陸自空自の部隊及び自治体側にカリスマ的な存在感を示していたようです。私はこの世的な好奇心と、キリスト者としてそのような神がかり的な人をどう理解したらよいのかという考えから、ぜひその人であって、当時の話を聞きたい

には災害派遣隊指揮官の経歴が書かれていました。派遣場所はあの後輩が派遣されたのと同じ場所…。私はすぐ後輩に電話しました。「キミが話をしていた最大余震を言い当てた指揮官の名前って何？」なんと本部長と同じ名前でした。

「間違いない！」私が見たいと思って忘れ得ないでいた人が、今、私の直属上司として目の前にいる。普通に空自の部隊にいればこんなことはありえませんが、地方協力本部という空自幹部としては珍しい配置にされたからこそ起きたことです。何という導きでしょうか！世間一般には「そんなのはただの偶然だよ。」で片づけられてしまうことかもしれません。しかし、キリスト者には偶然はありません。全ては神の御手の中なのであります。

私はほどなくして、最大余震を予言できたのはなぜかと本部長に尋ねました。すると意外な返事がありました。「あれは、阪神淡路大震災の時、約1か月後に最大余震が来たということ踏まえ、多分今回もそうだと思う、だいたい4月の中旬に大きな余震が起こると注意喚起をただけだ。別に予言したわけではない。」もしかしたら、謙遜気味にそう言っているのかもしれませんが、真実というものは、こういうことなのかもしれません。私たちが伝え聞く話というのは、大げさになってしまっていることもあるでしょう。また、この発言が元で、最大余震を言い当てた指揮官という噂が生まれ、カリスマ的なイメージが生まれたということは考えられると思います。

結果、私のこの世的な好奇心も、キリスト者としての疑問も、一挙にしばみました。でも、それで良いのだと思います。しかしなお言えることは、私のつまらない願いにも神様は応えてくださったということです。

主は確かに生きておられます。たとえ仕事が困難であろうとも、生活で様々な問題を抱えていようとも、主が間違いなくともにおられるということ、もうそれで充分なのだと思わされます。よく、神様が目の前に現れてくだされば信じられるのという趣旨の話を聞きますが、私には、思いがけない形で神

様がいらっしゃることを明確に示してくださることが少なからずあります。神様は本当に私を愛してくださっているのだということに、心から感謝したいと思います。

お祈りと献金に感謝

コルネリオ会のために祈ってくださる兄弟姉妹の皆さま本当にありがとうございます。

また、いつも尊い献金を奉げてくださる兄弟姉妹の皆さんにも心から感謝申し上げます。

さて、昨年の Interaction 以降、新しい兄弟姉妹が徐々に加えられています。神さまの導きを役員一同心から感謝しています。毎月実施されるコルネリオ会月例会も良き学びと交わりが与えられています。ご都合のつく方は是非参加くださり共に恵みを分かちあうことができれば幸いです。

石川会長のアジア大会参加報告にもありましたが、防大聖研の再開、英語聖書研究会の祝福ためにも是非お祈りください。また祈りの課題がありましたら是非メール等でお知らせください。祈りに覚えてまいります。

2016年も神様の祝福の内にクリスマスを迎えようとしています。今年も地震や風水害等自然災害が続きました。国際情勢も混とんとしており、来年もどのような年になるか分かりませんが、主の導きを信じ、共に祈ってまいりましょう。

良きクリスマスと新年をお迎えください。

編集子

献金感謝 (2016. 8. 1-2016. 11. 30)

いつもコルネリオ会を覚えていただき感謝致します。
矢田部稔、柳澤二郎、玉井佐源太、西澤邦輔、
桧原菜都子、北川政雄、廣田具之、石川信隆、
長濱貴志、今市宗雄、石井克直、吉田靖、中岡一秀、
手島浩、山下和雄、今村和男、圓林栄喜・さゆり、
梶原純一、滝口巖太郎、基督兄弟団 水戸教会、
伊澤 勲、瀬在道晴・米子、中野久永・しのぶ
献金先：郵便振替（口座番号 00130-3-87577）
加入者名（コルネリオ会）